

■（１３７）「雨傘原稿」の重要さを思う ——新型ロケットの打ち上げ中止

国産の新型ロケット「イプシロン」の打ち上げが、予定の１９秒前に中止された。鹿児島県の発射場近くや全国各地の科学館などに集まって、声を合わせてカウントダウンに臨んだ子どもたちは、「ゼロ！」と叫んだ後の静けさに、ただただ、ぼうぜんとしていた。

「雨傘原稿は用意していただろうか？」。子ども同様にあぜんとしていただろう担当記者の胸の内を想像した。技術の進歩や、町おこし効果を狙う地元の期待……。朝刊で大きく展開する原稿を考えていたはずだ。紙面作りを担うデスクや編集者も大量の原稿を待っていたに違いない。それが、目の打ち上げ中止で、予定にぼっかりと穴が開いた。そんな非常時の保険が「雨傘原稿」だ。

もともと、高校野球の取材時に使う原稿を指す言葉だ。連日の熱戦、のつもりでも、雨で突然の中止がある。予定されていたスペースが埋まらない。そんなピンチに備え、いつでも使える長めの原稿を持っておく。そうれば、白紙の新聞を出す心配もしなくてすむ……というわけだ。

今夏の甲子園は雨天中止がなかった。多数の記者がパソコンの中に書いていた「雨傘」は使われなかった。仕事も勉強も、ごみ箱行きの膨大な努力の上に成り立つということか。
(山)